「男、突っ走る！」

第41回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内雅也（20）	名古屋芸術専門学校２年生	
眞榮田浩平（20）	名古屋芸術専門学校２年生	
福沢瑞枝（20）	名古屋芸術専門学校２年生	
加藤直也（20）	名古屋芸術専門学校２年生	
大久保正樹（24）	名古屋芸術専門学校２年生	
山口拓海（20）	名古屋芸術専門学校２年生	
安永和也（20）	名古屋芸術専門学校２年生	
渡部康太（40）	名古屋芸術専門学校教務課長	
鈴本貴広（45）	名古屋芸術専門学校講師	
藤堂香（55）	名古屋芸術専門学校講師	
堀江朝日（36）	名古屋芸術専門学校講師	
堀内泰正（59）	名古屋芸術専門学校講師	
山浦重幸（59）	名古屋芸術専門学校講師	

1

居酒屋（夜）

雅也と正樹が食事をしながら話している。

正樹「木内ってさ、俺が趣味でカメラやってるの知ってるよな？」

雅也「もちろん。たまにインスタ見てるもん。なんて言ったっけ……モデルの人になってもらう……」

正樹「ポートレート？」

雅也「ああ、それそれ。だから、何となくは分かってた。しかも、ＳＮＳのトップ画で、カメラ持ってるし」

正樹「（笑って）確かに」

雅也「まあ俺には、とてもそんな技術はないんだけどね。どうしてもさ、文章でしか表現できないんだよ。そりゃ、シナリオライター専攻って言ってる以上はさ、ちゃんと画を意識して描かなきゃいけないんだけどね。なかなか、文章と映像のバランスが難しくて。それに、シナリオってどれだけ文

章で描いても、映像だったり舞台だったり、役者が演じたり監督やカメラマンが撮影したり演出しないと意味がないわけよ。言わば、作品の設計図になるわけだから」

正樹「じゃあ、脚本を書いて、それを映像化する機会はなかったのか？」

雅也「あるわけないじゃん。授業だって、映像に関するカリキュラムはないし、俺なんて映像どころかカメラだって何にも分かんないだもん」

正樹「俺もさ、これまでは写真、つまり動かない状態のものを撮ってきたんだよ。物を撮影する物撮りって言われるものだったり、人に頼んでモデルになってもらってそれを撮影したりして。大学の時から続けてきたんだけどさ、今年は動くものを撮れたらなと思って」

雅也「それはつまり、写真じゃなくて、動画とか映像ってことだよね？」

正樹「ああ。で、本題はこっからなんだよ。

映像を撮るって言っても、写真と違って、ただ歩いたり動いたりするところを撮るわけにはいかないんだよ。どうせやるんだったら、ちゃんとストーリーやキャラクターっていうのを作った、短編ドラマみたいなものができないかと思ってさ」

雅也「ほお」

正樹「木内に、その脚本をお願いしたくて」

雅也「え……俺が、脚本？」

正樹「自分でも書こうとも思ったんだよ。でも、授業じゃそういうことを学んでないし、やっぱり俺はカメラしかないって思ってさ。それでどうしようかなと思ってたんだけど、よくよく考えたら、この学校にはシナリオライター専攻ってところで、ちゃんと専門的に学んでる木内がいるって気づいたんだ。それで、声をかけたってわけ」

雅也「そういうことだったんだ。でも、もしドラマを作ることになったとして、撮影や編集や監督は大久保がやるわけでしょ。で

も、出演者はどうするの？」
正樹「目星はもうつけてるんだ。実は高校の同級生で、舞台俳優やってる奴がいて、そいつのツテでお願いしようと思ってる。それに、大学の同期にも読者モデルやってる奴がいるから、そいつにも頼んでみようかなって」
雅也「そんな繋がりがあるなんて、すごい……。じゃあ、ドラマを作れる状況はできてるんだ」
正樹「ああ。後は、脚本と手伝ってくれるスタッフを集めるだけだ」
雅也「なるほど」
正樹「木内が忙しいのは分かってるけど、今年だからできる企画だと思うんだよ、このドラマ制作は。来年は就活とかで、ゆっくり自主制作に没頭できる暇なんてないと思うし」
雅也「うん、それは言えてるね」
正樹「だろ。だから、今年中に制作して、年

度末の卒業進級制作展に作品として出そうと思って」

雅也「もうそこまでのスケジュール考えてたんだ」

正樹「もちろん」

雅也「そっか。もうそこまで考えてるんなら、断る理由なんかない。俺、頑張って脚本書くわ」

正樹「ありがとう、さすがは木内」

雅也「俺もね、ただ脚本を書くだけじゃなくて、ちゃんと形にできたらって思ってたの。でも、俺にはキャストのツテもないし、カメラや編集の技術も、プロデュース力もない。だから、こういう機会はまたとないチャンスだと思ってる」

正樹「よし、一緒に良い作品作ろう」

雅也「うん。よろしくお願いします」

強く握手を交わす雅也と正樹。

2　名古屋芸術専門学校・４階・４０１教

室

瑞枝と直也が、それぞれパソコンで作業をしている。

直也「なあ、福本」

瑞枝「何？」

直也「キャリアセンターからのメール、見たか？」

瑞枝「ああ、インターン募集のこと？」

直也「福本はどうする？」

瑞枝「考え中。せっかくの機会だからね、やりたいとも思うんだけど。加藤は、どうするの？」

直也「俺はもちろんエントリーするさ」

瑞枝「だよね」

直也「今年は、来年の就活に向けての準備の一年だと思ってる。そのためには、どこにチャンスが落ちてるか分からないからな。もちろん、自主制作だってするし、ポートフォリオだってブラッシュアップするさ」

瑞枝「そうやっていろいろやってると、一年

あっという間に終わるんだろうな。去年一年も、そうこうしていくうちに、あっという間だったからね」

直也「そうそう。呑気に遊んでる暇なんてないんだよ」

と、ドアが開き、鈴本が入ってくる。

鈴本「お、やってるな」

瑞枝・直也「おつかれさまです」

鈴本「お前らがもう二年生か、早いなぁ。一年早く感じただろ」

直也「はい」

瑞枝「ええ」

鈴本「早く感じるってことは、それぐらいお前らが作品作りに時間をかけてたっていう証拠だぞ。これからインターンや就活の準備で、ポートフォリオが絶対必要になる。俺たちクリエイターにとって、ポートフォリオというのは自分自身を現すものだ。そこでは個性が出る。だから手を抜けば当然、相手にもそれが伝わる。ポートフォリオ制

作には、絶対手を抜くなよ」

直也「作ったら、また添削お願いできますか？」

瑞枝「私も、ぜひお願いします」

鈴本「任せろ。校内回って、俺を探すんだな」

瑞枝「（笑って）分かりました」

鈴本「じゃあ、お疲れ（と去っていく）」

瑞枝・直也「おつかれさまです」

瑞枝「ポートフォリオ、どうしようかな」

直也「授業課題とデッサン、あと卒業進級制作展用の個人作品かな、載せるとしたら」

瑞枝「やっぱり、自主制作ちゃんとやらないとなぁ。ポートフォリオの見た目が良くても、中身スッカスカじゃどうしようもないもんね」

直也「そりゃそうだろ。だから、常に何かしら制作してないといけないってことなんだよ。技術をインプットしたって、アウトプットが何もできてなかったら、絶対腕は落ちるだろ」

瑞枝「みんな、どうしてるのかな」
直也「そりゃ、各自で作品作るだろ。とても授業課題だけじゃ、ポートフォリオの内容には限界があるだろうし。何をどうするかは、みんなそれぞれだけど、福本もいろいろ準備したほうが良いぞ」
瑞枝「うん……分かってる」
険しい顔のままの瑞枝。

3　同・2階・会議室
渡部、藤堂、堀内、堀江、山浦が会議をしている。
堀江「え、学生主体ですか？」
堀内「はい。これまで、一年生の合同文芸誌以外の各編集部は、編集長や副編集長を我々講師が担当していましたが、私たちはあくまで講師であり、主体的に動かなきゃいけないのは学生たちです。講師たちは顧問や監修、アドバイザーという立場で、学生をバックアップしていくほうが良いと思

っています」

山浦「しかし、編集長などの肩書きを背負わせることが、返って学生たちの負担にはならないでしょうか」

堀江「私もそれを危惧しています」

藤堂「学生の主体性を育むという点では、私は堀内先生の意見に賛同します」

堀内「山浦先生の言うように、文章系の学生はどちらかというと物静かで、先頭に立つことが苦手な学生が多いでしょ。編集長を任せることが負担になるということは、一理あると思います」

山浦「だったら……」

堀内「（遮って）でも私は、その負担も学生たちに経験をさせてあげたいと思っています。もしそれで、自分が無理だと思ったり厳しいと思った時に手を差し伸べるのが、我々講師の役目だと思っています」

藤堂「（渡部に）渡部先生、担任という立場から、何かご意見ありますか？」

渡部「講師の先生方の、学生への思いがそれぞれにおありになることを大変有り難く思います。うちの学校では、とにかくプロに学ぶということを一番の強みにし、ホスピタリティを大事にすることを方針に掲げています。なので、堀内先生の仰るように、学生主体として、まずは経験をさせてあげる中で講師がバックアップに入るのは、とても良いご提案だと思います」

堀内「ありがとうございます」

渡部「山浦先生や堀江先生がご心配される気持ちも分かります。しかし、堀内先生の仰るように、あくまでも各編集部の作品というのは、学生たちの作品です。その学生たちの作品の編集長や副編集長を講師がしているというのは、あまり良くないかもしれません。なので、形式上は学生が主体ということにして、講師の先生方が随時フォローに入っていただくというスタイルが一番良いかもしれません」

藤堂「確かに、いきなり学生たちに丸投げをしても上手く行くとは思えません。それなら、今渡部先生が仰ったようなスタイルが一番良いかもしれません」

渡部「いかがでしょう。堀江先生、山浦先生」

山浦「まあ、そうやって少しずつシフトチェンジするのであれば」

堀江「学生と常にコミュニケーションを取っていないと、何に悩んで何が大事なのか気づけないかもしれませんので、そこは徹底したほうが良いと思います。ギリギリになって、無理、できませんと学生に言われても、私たちだけで対応しきれないことだってあるかもしれませんからね」

渡部「もちろん、そこは担任として、私もフォローに入ります」

堀内「私の授業でも、毎週学生たちにヒアリングしていきます」

渡部「先生方、引き続き学生たちのフォローをよろしくお願いします（と頭を下げる）」

4　同・9階・図書室（数日後）

和也が本を探しながら、流し読みをしている――何冊か手に取ると、テーブルに積み重ねて、読み始める。

と、拓海が入ってくる。

拓海「あれ、やっすー」

和也「あ、ぐっち」

拓海「こんなにもどうしたの？　（と本を見て）全部、ホラー系の話じゃん」

和也「うん。お化け屋敷の参考になるかなと思って」

拓海「なるほどね」

和也「ぐっちは？」

拓海「ああ、イラストの参考書を見に来たの」

和也「そっか」

拓海「ねえ、お化け屋敷、人集まった？」

和也「うん、一年生が、やっぱり多く来てくれた」

拓海「やっぱり人気なんだね。一年前を思い

出すわ」
和也「本当だよね。去年も一年生が多かった。それで今に至るんだもんね」
拓海「あの時、お化け屋敷やってなかったら、俺も今頃、こんなにいろんな専攻の子と仲良くすることなんてなかったもしれないもんな」
和也「俺もそれは思う。だから、改めて考えると、学園祭の中でも、お化け屋敷の企画って特別な存在なんだなって感じる」
拓海「今年はみんな、作品作りに時間をかけるかもしれないけど、それでも遊ぶ時間も大事にしないとな」
和也「それに、俺たち今年で二十歳になるんだ。誕生日来た人は、お酒も飲めるんだから」
拓海「だよね。また違う意味で楽しみが増えそうだ」
和也「みんなで飲み会やりたいね」
拓海「絶対盛り上がるでしょ」

和也「盛り上がらないわけがないわな」
拓海「あ、ごめん。邪魔しちゃったね。俺だってお化け屋敷の実行委員会なんだから、必要になったらいつでも声かけてくれよ。じゃあ、また。おつかれ」
和也「ありがと、おつかれ」
と、出ていく拓海――本を開いて読み始める和也。

5　同・4階・401教室
正樹がパソコンで書類を作っている――険しい顔で悩んでいる。
正樹「うーん」
と、近くで作業をしている瑞枝が顔を覗くと、
瑞枝「どうしたの？」
正樹「企画書づくりが、どうも上手くいかなくてさ」
瑞枝「（パソコンの画面を見て）自主ドラマ企画？」

正樹「ああ。年度末に向けて、自主ドラマ作ろうと思って。監督とプロデューサーとカメラマンは俺、脚本はシナリオ専攻の木内」

瑞枝「へえ、そんな話進んでたんだ」

正樹「出演するキャストに渡すための企画書を作ろうと思ってたはみたものの、何をどう書こうと思ってさ」

瑞枝「ストーリーとか、内容は決まってるの？」

正樹「あ、まだそこまで決めてない」

瑞枝「そりゃ進まないよ。内容も決まってなかったら、キャストだって決まらないし、ストーリー次第じゃ出演できないって言いだしてくる人もいるんじゃない？」

正樹「それもそうだ」

瑞枝「ちょっと、リフレッシュしてきたら？」

正樹「タバコ吸ってくるか」

と、出ていく――入れ違いで、浩平が入ってくる。

浩平「おつかれ」

瑞枝「あ、眞榮田。今日、時間ある？」
浩平「別に良いけど」
瑞枝「ちょっと、話があって」
浩平「おお」

6　お好み焼き屋（夜）
浩平と瑞枝が、お好み焼きを食べながら話している。
浩平「何だ、話ってそんなことかよ」
瑞枝「そんなことって、こっちとしては結構重要な話なんだけど」
浩平「確かに、ゆきちゃんとのことでは、みんなに迷惑かけました」
瑞枝「自覚があるなら、尚の事だわ。結局私たちって、眞榮田と同じ映像専攻だから、どうしたって眞榮田の肩を持つことになっちゃうでしょ。聞いたけど、うっちーは両方から相談に乗ってたらしいじゃん。でも私は、眞榮田からしか話を聞いてなかったから、ゆきちゃんの言い分は分からないし、

今更聞いたところでどうなるものでもない。
だから、ゆきちゃんとも顔合わせづらいことが、何か私の中でモヤモヤしちゃうの。
それに今度入ってきた映像専攻の一年生はみんな女の子でしょ。正直、何があるか分からないじゃん」

浩平「何があるって言うんだよ」

瑞枝「自分の胸に手を当てて聞いてごらんよ」

浩平「福本……」

瑞枝「取り越し苦労になるかもしれないけど、私はいろいろ心配なの。それに、もし何かあってごらんよ。同じ専攻同士でしょ。私たちだってやりにくくなるの。特に私たちの学年は、他専攻同士の繋がりが深い分、正直色恋沙汰だって結構あるでしょ。色々話は入ってくるの。私はね、後輩たちには良い影響を与えたいの。言葉の語弊はあるかもしれないけお、そんなくだらないことで悪い影響は与えたくないの。私たちは、もう二年生なの。後輩が入ってきた以上は、

それなりのことをしないといけない。分からないことがあったら、教えてあげることだってあるかもしれない。そういうことを考えると、去年やってきたことを反面教師にして、今年はもっとまともな学校生活を送ってほしいの。私だって、今年はインターンやポートフォリオ制作で、恋愛なんてする余裕はないと思ってる。それぐらいの覚悟がないと、私たちの業界はやってけないの。眞榮田にも、それぐらいの覚悟を望んでほしいというか、肝を据えてほしいの」

浩平「（苦笑して）福本に、そんな説教されるなんて思わなかったよ」

瑞枝「私だって、だてに一年顔合わせてるわけじゃないもの。余計な心配かもしれないと思ったけど、やっぱり眞榮田にははっきり伝えておかなきゃいけないと思ったから」

浩平「俺も、今年は作品とポートフォリオ制作に専念したいとな」

瑞枝「恋愛の巡り合わせなんて、いつどこで

あるか分からない。恋愛するなとは言わないし、私だって自分の身に何もないとは言い切れない。けど、眞榮田の倍は、学校内で相手を見つけるのはやめたほうが良いかもね」

浩平「反論の余地もありません」

瑞枝「まあ、こればかりは縁だから、学校内で恋愛をするなっていう権限は私にはないよ。でも、おススメはしないことだけは言っとく」

浩平「目先の目標としては、映像専攻のみんなに迷惑をかけないことだな」

瑞枝「そうそう」

浩平「努力します」

瑞枝「最善を尽くしてください」

浩平「はい」

と、思わず口をつぐむ浩平――監視するように意地悪な顔をする瑞枝。

つづく